

市 勢

- 1 沿 革 5
- 2 位 置 及 び 地 勢 6
- 3 市 域 の 変 せん 7
- 4 人 口 8

1 沿 革

何億年のむかし、現在の熊本市の大部分は一面の海底で、処々に小島が散在するに過ぎなかったと想像されるが、その後数次にわたる地表上の大変動によって、次第に熊本平野が形成されるにともない、現在の出水・健軍方面の砂礫層から湧きでる清冽な泉をめぐって、弥生式土器民族のかなり大きな聚落が完成されていた。

時移って、^{たていわたつのみこと}健甕竜命の阿蘇の国建設、景行天皇の西征、神功皇后の新羅遠征など、国家的大事件はとくに熊本地方と関係が深かったようであるが、現在ではそれらを裏付けるに足りる記録伝説の類は何も残っていないようである。

西紀646年、大化の改新が行なわれると、託麻の三宅郡（今の出水地方）には、肥後の国府「託麻府」が設けられ、宏壮な伽藍の国分寺の建立を見たが、これらを中心とした聚落が形づくられ大きくなったものが、熊本市の始まりである。

奈良朝前後の日本各地は、国力の大小によって、大・上・中・下と四等級に区別されていたが、肥後はそのころ農産物産出量で九州諸国中群を抜いており、延暦14年9月（平安の初期）に至って、全国中でも優位の資格を認められ「大国」に昇進した。

この期に国司として、肥後に赴任した道君首名、^{みちのきみのおびとな}紀夏井、藤原保昌、清原元輔等はいまも幾多の遺跡を留めているが、とくに後撰集の選者で、清少納言の父元輔と、平安期歌人「檜垣女」との交遊の説話は有名である。

南北朝50年間は、戦乱の日が相つぎ、熊本地方もしばしば軍営の場に利用された。

長い戦乱のあと、天下が統一されるや、肥後全土の守護職は改めて菊池氏に委ねられ、一国政令の中心は隈部（現在の菊池市）の方に移った。

降って、文明元年（1469年）菊池の一族出田三郎秀信は、いまの熊本城東部の丘陵に千葉城（熊本城の始め）を構えたが、次の鹿子木親員が、明応年間（1490年代）に、今の古城の地に居城を移し、隈本城と称えた。

ついで、城親冬と、佐々成政のあとを承けて天正16年（1588年）加藤清正が入城するにおよんで、清正は国府の二本木方面から、寺院、商家などを移転させて、城下町の経営に着手した。また、この清正は熊本の自然に、はじめて大規模な人為のツルハンを振った武将で、河川、その他の土木事業に残した功績は大きく、熊本市が城下町としての体裁を整えてきたのは、このころからである。日本三名城の一つと謳われる熊本城は、この清正が慶長6年から12年にかけて、7カ年の日子を費して築城したものである。

細川氏時代は、寛永9年細川忠利の入国によって始まるが、細川氏は自来大政奉還の日に至るまで、200有余年間にわたって肥後熊本の政治を行なった。この細川氏は、歴代名君相ついだが、そのうち、もっとも注目すべきは、延享4年藩主となった8代重賢の治政であろう。このとき国政揚り、教学も大いに振興した。とくに藩饗「時習館」や、全国にさきがけて創設された医療乃至教育機関としての「再春館」、薬草研究で有名な「蕃滋園」などは、本市が長く文教の府として全国に秀でた因となった。また忠利のときに創建された水前寺は、幽斉の古今伝授の間とともに、いまも熊本市の観光資源の一つとなっているが、晩年を熊本に送った剣聖宮本武蔵の遺跡も、熊本が持つ誇りの一つといえよう。

明治4年7月に入って、廃藩置県の大詔が出されると、肥後には、熊本、人吉の二県がおかれ、ついで同年11月改めて熊本、八代の二県となった。ところが翌5年6月熊本県は、ふたたび白川県と改称され、翌々6

年1月には八代県が廃止されて、白川県に併合されたため、肥後全域は白川県の所轄となり、熊本市には県庁が設けられた。これは明治9年1月まで続いたが、同年2月さらに改めて熊本県と称せられるようになった。

このころ熊本城には鎮台がおかれ、市内には洋学校と、西洋医学の熊本医学校が出来て熊本市は城下町としてにぎわいを見せていたが、9年の神風連事件、翌10年の西南の役と引き続き大きな戦禍に見まわれ、とくに西南の役では、全市街が焦土と化してしまった。22年4月、市町村制が施行されるとこれまでの「熊本区」は、「熊本市」と改められた。

明治の初年から、九州における政治・軍事の中心として、各種の官庁が置かれていた熊本市は、24年汽車の開通によって熊本駅が設けられ、又30年代に入って市区改正の大事業が行なわれ、中央部の山崎練兵場が市外に移されて新市街が出現するや、会社、工場、商店その他施設が続々と軒を連ね、日清、日露の戦勝の意気も加わって、明治の隆昌期を現出した。

大正10年、周辺12カ町村を併合して大熊本市の基礎を固め、私鉄菊池軌道、熊本軌道、御船鉄道及び国鉄宮地線の開通整備と並んで13年には市電の開通があり、更に上水道施設、二十三聯隊の移転等によって、いよいよ近代都市の面目を新にすることになった。しかし、昭和20年には空襲を受けて全市の大半は瓦礫と化した。その後全市民の涙ぐましい努力によって、戦災、水害等各種の苦難を克服し、今日の隆盛を見ることができたが、市制施行当時4万2千余人を数えるにすぎなかった城下町も、その後次々と市域を拡張、今や人口43万有余、西日本の雄都として躍進の一途を進んでいる。新しい施設として熊本城天守閣の復元、市民会館、水辺動物園等を誇り、鹿児島本線の複線電化、九州縦貫自動車道や高遊原新空港の整備進捗と相俟って、一層の環境整備と産業振興を意図し、明るく豊かな郷土の建設に住民相携えて邁進しつつある。

2 位置及び地勢

(1) 位置

熊本市は熊本県の西北部、東経130度42分・北緯32度48分の位置にある。これと同緯度の都市としては長崎市や中国の南京がこれに近い。本市は緯度からいえば温暖な地帯に属するが、有明海との間に金峰山火山帯があるために、大陸の気候となり、寒暖の較差が大きく気候的には恵まれているとは云えない。地理的空間は、西北部から北部にかけては金峰山を主峰とする複式火山帯と、これに結ぶ立田山等の小火山の噴出物に掩われる台地によって構成されている。南半は、白川の三角州である低平な熊本平野によって占められており、この白川流域からと坪井川、井芹川等が北半の台地の中に平野を切り開いている。このような地形的制約があるため、本市の発展は、北部と西部において停滞を余儀なくされ、東方および南方へ伸長している。ことに肥後台地の南縁を縫う東南方へ都市膨張の重心が走向するのは、その南方熊本平野が主要な米作地で、肥沃な水田地帯としての機能が尊重されるからであろう。

本市が商工都市としての飛躍的發展をとげるためには適当な外港を保持することが、年来の希望であったが、松尾村並びに小島町の合併で百貫港を得たことにより、その念願を遂げたのである。

国道は、福岡から鹿児島へ向って西九州を縦断し、国道熊本・大分線、県道熊本・宮崎線等はいずれも本市を中心としている。九州の幹線鉄道である鹿児島本線は、門司を起点として福岡・久留米・大牟田を経て本市を貫き八代を経て鹿児島に達し、本市を起点とした三角線は、宇土から分岐して三角に至り海路島原・長崎を結び、また豊肥線は大分と結び、九州横断自動車道による別府・長崎を連ねる国際観光路線及び近年

整備進捗中の九州縦貫自動車道による陸上輸送道路を以て、更に近く高遊原新空港の開設によって、九州交通網の中心として要衝的位置を占めている。

(2) 地 勢

阿蘇火山と、金峰山系との接合地帯の上に存在する本市は、多くの山岳、丘陵、台地等によって、完全に四方を囲まれているが、本市の西北部に連なる荒尾山(445m)や石神山(164m)、天狗山(237m)、本妙寺山(220m)、さらに西南部に隆起する花岡山(133m)、市の東北境の立田山(151m)等の山々は、いわゆる金峰山系の一部として、阿蘇火山がその熔岩や粘土、砂礫、火山灰などをもって熊本市建設の基礎工事を完成する以前に、その大体の骨組みを形成していたものである。一方河川では、阿蘇火山に源を発する白川、北方鹿本郡界に流れを発する井芹、坪井の両河川、また水源を水前寺に発する江津湖は、木山川と合して加勢川となっている。これらの諸河川はかんがい水として、とくに市南部一帯の平野をうるおし、農作に大きな効用をもたらしている。

3. 市 域 の 変 遷

面積 145.24Km²



(注) 点線区域の託麻村は本年11月1日編入予定

(託麻村人口9,154人・世帯数1,943世帯・面積24.48Km²)

4. 人 口

(1) 年次別人口及び世帯数

(各年12月現在)

年 次	世 帯 数	人 口 数			男女比 (男100) 人につき	1 世 帯 当り人口	備 考
		総 数	男	女			
明治22年	11,797	42,725	...	...	...	3.6	
大正元年	12,736	66,488	35,938	30,550	85.0	5.2	
8年	13,129	74,544	39,385	35,159	89.3	5.7	
昭和元年	27,157	150,075	75,680	74,395	98.3	5.5	
5年	30,284	167,566	83,218	84,348	101.4	5.5	
10年	38,336	214,270	111,480	108,790	97.6	5.6	
15年	39,813	243,574	116,838	126,736	108.5	6.1	川尻町・日吉・力合村合併
20年	37,981	180,643	84,935	95,708	112.7	4.8	
25年	59,865	267,506	128,067	139,439	108.9	4.5	(国勢調査)
30年	71,978	332,493	159,501	172,992	108.5	4.6	松尾村合併
35年	90,772	373,922	178,031	195,891	110.0	4.1	(国勢調査)
40年	107,634	407,052	192,538	214,514	111.4	3.8	(国勢調査)
41年	111,312	416,381	197,022	219,359	111.3	3.7	推計人口
42年	115,961	424,494	201,016	223,478	111.2	3.7	"
43年	122,352	431,999	204,467	227,532	111.3	3.5	"
44年	130,993	438,027	206,977	231,050	111.6	3.3	"

(2) 校区别人口及び世帯数

(昭和40年 国調)

校区别	世 帯 数	人 口			校区别	世 帯 数	人 口		
		総 数	男	女			総 数	男	女
総 数	107,634	407,052	192,538	214,514	古 町	2,414	8,421	3,834	4,587
					向 山	3,126	11,643	5,536	6,107
城 西	2,420	9,892	4,531	5,361	本 莊	2,096	7,328	3,360	3,968
花 園	2,611	9,866	4,649	5,217	春 竹	3,764	14,344	6,708	7,636
池 田	3,445	12,972	6,074	6,898	白 川	3,018	11,400	4,972	6,428
清 水	3,441	15,487	8,565	6,922	大 江	4,644	15,097	7,315	7,782
城 北	1,526	5,699	2,703	2,996	託麻原	5,731	20,111	10,086	10,025
竜 田	1,093	4,949	2,438	2,511	白 山	3,375	11,656	5,527	6,129
黒 髪	6,972	20,385	10,210	10,175	出 水	3,958	14,118	6,595	7,523
壺 川	3,996	14,013	6,312	7,701	砂 取	3,619	13,649	6,641	7,208
碩 台	3,355	11,821	5,120	6,701	帯 山	4,412	16,326	7,864	8,462
城 東	2,609	10,380	4,229	6,151	尾ノ上	1,970	7,733	3,707	4,026
慶 徳	1,200	4,839	2,050	2,789	健 軍	3,073	13,200	6,792	6,408
五 福	1,361	5,220	2,368	2,852	秋 津	1,639	6,652	3,181	3,471
一 新	4,130	15,635	6,982	8,653	若 葉	1,982	7,222	3,422	3,800
春 日	3,022	11,556	5,417	6,139	泉ヶ丘	2,951	10,992	5,133	5,859
池 上	874	4,088	1,928	2,160	画 津	797	3,695	1,773	1,922
松 尾	711	3,472	1,636	1,836	田 迎	899	4,055	1,908	2,147
小 島	909	4,183	1,946	2,237	御 幸	636	3,065	1,471	1,594
中 島	898	4,554	2,145	2,409	日 吉	2,186	9,089	4,392	4,697
城 山	940	4,469	2,117	2,352	力 合	1,052	4,589	2,152	2,437
高 橋	304	1,271	570	701	川 尻	2,247	9,226	4,345	4,881
白 坪	2,228	8,690	4,034	4,656					

(3) 産業別15才以上就業者数

調査年次 区 分	35年国調		40年国調			
	総数	構成比	総数	構成比	男	女
総数	373,922	—	407,052	—	192,538	214,514
15才以上人口	267,755	—	306,668	—	141,134	165,534
就業者総数	152,612	100%	176,126	100%	105,249	70,877
第1次産業	17,475	11.5	14,907	8.5	7,596	7,311
農業	15,767	10.3	13,599	7.7	6,634	6,965
林業・狩猟業	713	0.5	722	0.4	587	135
漁業・水産養殖業	995	0.7	586	0.3	375	211
第2次産業	32,501	21.3	38,633	21.9	26,131	12,502
鉱業	454	0.3	314	0.2	264	50
建設業	11,330	7.4	14,332	8.1	11,893	2,439
製造業	20,717	13.6	23,987	13.6	13,974	10,013
第3次産業	102,613	67.2	122,318	69.4	71,420	50,898
卸売・小売業	42,041	27.5	48,636	27.6	24,729	23,907
金融・保険・不動産業	5,483	3.6	6,976	4.0	3,798	3,178
運輸・通信業	10,285	6.7	13,235	7.5	11,300	1,935
電気・ガス・水道業	1,245	0.8	1,369	0.8	1,171	198
サービス業	30,861	20.2	36,658	20.8	16,975	19,683
公務	12,698	8.3	15,444	8.8	13,447	1,997
分類不能の産業	23	0	268	0.2	102	166

1. The first part of the document discusses the importance of maintaining accurate records of all transactions and activities. It emphasizes that proper record-keeping is essential for transparency and accountability, particularly in financial matters. The text suggests that organizations should implement robust systems to track every detail, from small expenses to major investments.

2. The second section focuses on the role of technology in modern record-keeping. It highlights how digital tools can streamline the process, reduce errors, and provide real-time access to data. The author argues that embracing technology is not just a convenience but a necessity for staying competitive in today's fast-paced environment.

3. The third part of the document addresses the challenges of data security and privacy. It notes that as more information is stored digitally, the risk of breaches and unauthorized access increases. The text provides several recommendations for safeguarding sensitive data, including regular security audits, employee training, and the use of encryption techniques.

4. The fourth section explores the legal implications of record-keeping. It discusses various regulations and standards that organizations must adhere to, depending on their industry and geographical location. The author stresses that compliance is not only a legal requirement but also a way to build trust with stakeholders.

5. The fifth part of the document touches upon the human element of record-keeping. It acknowledges that while technology and systems are important, the people who manage the records are equally crucial. The text encourages organizations to foster a culture of responsibility and accuracy, where every team member understands the importance of their role in maintaining the integrity of the records.

6. The final section of the document provides a summary of the key points discussed and offers some concluding thoughts. It reiterates that effective record-keeping is a continuous process that requires ongoing attention and improvement. The author ends with a call to action, urging organizations to take the necessary steps to ensure their records are accurate, secure, and accessible.